

8月新着図書

おひとり3冊まで、2週間（新着本は1週間）借りられます。



日野南コミュニティハウス

極楽征夷大將軍

直木賞受賞作品

著者名：垣根涼介

やる気なし使命感なし執着なしなぜこんな人間が天下を獲ってしまったのか？動乱前夜、北条家の独裁政権が続いて、鎌倉府の信用は地に墮ちていた。足利直義は、怠惰な兄・尊氏を常に励まし、幕府の肅清から足利家を守ろうとする。やがて天皇から北条家討伐の勅命が下り、一族を挙げて反旗を翻した。一方、足利家の重臣・高師直は倒幕後、朝廷の世が来たことに愕然とする。後醍醐天皇には、武士に政権を委ねるつもりなどなかったのだ。怒り狂う直義と共に、尊氏を抜きにして新生幕府の樹立を画策し始める。混迷する時代に、尊氏のような意志を欠いた人間が、何度も失脚の窮地に立たされながらも権力の頂点へと登り詰められたのはなぜか？幕府の祖でありながら、謎に包まれた初代將軍・足利尊氏の秘密を解き明かす歴史群像劇。

もっと悪い妻

著者名：桐野夏生／著

男たちの身勝手さを、一行で打ち砕く桐野文学の極北！夫公認のもと、元恋人と自由な時間を過ごす妻を描いた表題作「もっと悪い妻」など、計六作の短編を収録。

ほどよく忘れて生きていく 91歳の心療内科医の心がラクになる診察室

著者名：藤井英子／著

京都にある、小さなクリニック。そこにいるのは90歳の心療内科医。日々訪れる患者さんに届けているのは、からだところがラクになる処方箋です。心配も、期待も、過去のよかったはほどよく忘れて、でも、絆と挑戦の炎は心に留めて、「自分を大事」に若々しく生きていく！

シン・老人力

著者名：和田秀樹／著

自分らしく、若々しく、新たな老人像を描く日野原重明さんや五木寛之さんが提唱した「新老人」の概念を踏まえ、あらためてこの時代に私が「シン・老人」を定義するのなら、「何歳になっても意欲や好奇心を持ち、元気に出歩いて消費もする、社会とつながりを持って暮らす老人」となります。

ハンチバック

芥川賞受賞作品

著者名：市川沙央

「本を読むたび背骨は曲がり肺を潰し喉に孔を穿ち歩いては頭をぶつけ、私の身体は生きるために壊れてきた。」圧倒的迫力&ユーモアで選考会に衝撃を与えた、第128回文学界新人賞受賞作。井沢釈華（しゃか）の背骨は、右肺を押しつぶす形で極度に湾曲している。両親が遺したグループホームの十畳の自室から釈華は、某有名私大の通信課程に通い、しがたつ記事を書いては収入の全額を寄付し、18禁TL小説を投稿し、零細アカウントでツイートする――。

この夏の星を見る

著者名：辻村深月／著

れていても、空はひとつ。全国の中高生たちは天文活動を通じてつながっていく。2020年春、コロナ禍で登校や部活動が次々と制限される中、牛国の中高生は複雑な思いを抱えていた。茨城県の高校二年生、亜紗。渋谷区の中学一年生、真宙。長崎県五島列島の旅館の娘、円華。それぞれに天文活動に出会った生徒たちは、オンライン会議を駆使して、全国でつながっていく。望遠鏡で星をつかまえるスピードを競う「スターキャッチコンテスト」開催の次に彼らが狙うのは――。

赤い月の香り

リクエストありがとうございませう

著者名：千早茜／著

天才調香師は、人の欲望を「香り」に変える――。直木賞受賞第一作。『透明な夜の香り』続編！「君からはいつも強い怒りの匂いがした」カフェでアルバイトをしていた朝倉満は、客として来店した小川朔に、自身が暮らす洋館で働かないかと勧誘される。朔は人並外れた嗅覚を持つ調香師で、その洋館では依頼人の望む香りをオーダーメイドで作り出す仕事をしていた。朔のもとには、香りにまつわるさまざまな執着を持った依頼人が訪れる。その欲望に向き合ううちに、やがて朔が満を仕事に誘った本当の理由が分かり……。香りを文学へと昇華させた、第6回渡辺淳一文学賞受賞作『透明な夜の香り』に続く、ドラマチックな長編小説。

正々堂々 私が好きな私で生きていいんだ

著者名：西村宏堂／著

自分の気持ちに嘘をつくのは罪。もう他人を気にして生きるのにはやめにしない？LGBTQで伴侶でメイクアップアーティストが説く自分を大事にする生き方。

いい子のあくび

著者名：高瀬隼子／著

芥川賞受賞第一作。公私共にわたしは「いい子」。人よりもすこし先に気づくタイプ。わざとやってるんじゃない、いいことも、にこにこしちゃうのも、しちゃうから、しちゃうだけ。でも、歩きスマホをしてぶつかってくる人をよけてあげ続けるのは、なぜいつもわたしだけ？「割り合に合わないさ」を訴える女性を描いた表題作（「いい子のあくび」）。

夜果つるところ

著者名：恩田陸／著

ミステリ・ロマン大作『鈍色幻視行』の核となる小説、完全単行本化。「本格的にメタフィクションをやってみたい」という著者渾身の挑戦がここに結実……！謎多き作家「飯合梓」によって執筆された、幻の一冊。『鈍色幻視行』の登場人物たちの心を捉えて離さない、美しくも惨烈な幻想譚。

木挽町のあだ討ち

直木賞受賞作品

著者名：永井紗耶子

疑う隙なんぞありはしない、あれは立派な仇討ちでしたよ。芝居町の語り草となった大事件、その真相は――。ある雪の降る夜に芝居小屋のすぐそばで、美しい若衆・菊之助による仇討ちがみごとに成し遂げられた。父親を殺めた下男を斬り、その血まみれの首を高くかかげた快挙は多くの人々から賞賛された。二年の後、菊之助の縁者という侍が仇討ちの顛末を知りたいと、芝居小屋を訪れるが――。現代人の心を揺さぶり勇気づける令和の革命的傑作誕生！

鈍色幻視行

リクエストありがとうございませう

著者名：恩田陸

撮影中の事故により三たび映像化が頓挫した小説『夜果つるところ』と、その著者・飯合梓の謎を追う小説家の落谷梢は、関係者が一堂に会するクルーズ旅行に夫・雅春とともに参加した。船上では、映画監督の角替、映画プロデューサーの進藤、編集者の島崎、漫画家ユニット・真鍋姉妹など、『夜〜』にひとかたならぬ思いを持つ面々が、梢の取材に応じて語り出す。次々と現れる新事実と新解釈。旅の半ば、『夜〜』を読み返した梢は、ある違和感を覚えて――。